

令和3年度「地域づくり表彰」表彰式 実施報告書



にぎわい創出拠点「三津ハマル」(愛媛県松山市)



「茶の実プロジェクト」交流会(佐賀県嬉野市)



全国地ビールと地元野菜おつまみ(岩手県一関市)



ママたちの子育て×学び×仕事(鹿児島県瀬戸内町)



ボランティア運営直売所の賑わい(新潟県柏崎市)



地熱体験エコツーリズム(福島県福島市)



じぶんごとの「はしふき」(長崎県長崎市)



「アジフライの聖地」を宣言(長崎県松浦市)



長崎鼻に咲き誇るひまわり(大分県豊後高田市)



フラワーロード沿いの花壇(鹿児島県長島町)

令和4年2月
令和3年度「地域づくり表彰」事務局

はじめに

令和3年度の「地域づくり表彰」表彰式については、新型コロナウイルス感染予防の観点から、前年度に引き続き、受賞団体の意向を踏まえつつ、主として各受賞団体の所在都道府県庁、市町村役場、国土交通省地方整備局庁舎等において、それぞれの幹部あるいは本省職員より、個別に表彰状を手交し、各地の地元紙等で取り上げられました。

本報告書は、令和3年10月27日から12月3日までに実施した各地の表彰式についてその実施状況を報告するものです。

本事業の実施について、ご協力を頂いた皆様に厚く感謝申し上げます。

令和3年度「地域づくり表彰」事務局

目 次

令和3年度「地域づくり表彰」表彰式 各地の様子

参考1. 「地域づくり表彰」制度の概要

参考2. 令和3年度「地域づくり表彰」総評

参考3. 令和3年度「地域づくり表彰」審査会委員名簿

参考4. 「地域づくり表彰」受賞団体の概要

令和3年度「地域づくり表彰」表彰式 各地の様子

表彰状の授与は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、各受賞団体の意向に沿って、10月下旬から12月上旬にかけて、感染リスクの少ない形で個別に各地域等で開催させていただきました。

【国土交通大臣賞（地域づくり部門）】

三津浜地区にぎわい創出実行委員会

(愛媛県松山市)

日時：令和3年11月2日（火）14時～

場所：松山市三津浜支所

受領者：「三津浜地区にぎわい創出実行委員会」

会長 瀬村 要二郎 様

授与者：国土交通省 四国地方整備局

吉田 信博 建政部長



(備考)

・11月20日には、実行委員会のメンバーが、三津ハマルが入っている建物や、他の活動現場計5カ所に「国土交通大臣賞 受賞」の記念立て看板を設置したとのこと。

・瀬村会長「表彰は励みになる。町を何とか活性化したいと、もともとあった資源を生かしてやってきた。商店街などに新しい人が入ってくことで、にぎわい創出や新たな魅力に繋がっている」

・愛媛新聞等に記事掲載。

【国土交通大臣賞（小さな拠点部門）】

春日活性化委員会

(佐賀県野市)

日時：令和3年10月29日（火）10時45分～

場所：佐賀県庁舎

受領者：「春日活性化委員会」

代表 中村 正太 様

授与者：佐賀県 山下 宗人 地域交流部長



(備考)

・中村代表は、国交大臣賞の受賞を、山口祥知知事に報告し歓談。

・中林代表「今後はおしゃれで快適に自然体験ができる「グランピング」や農業など、滞在型の体験拠点施設としての旧分校を模索したい」産業と福祉を連動した活性化策にも思いを巡らせている。

・佐賀新聞等に記事掲載。

【全国地域づくり推進協議会会長賞
(地域づくり部門)】

全国地ビールフェスティバル
一関実行委員会
(岩手県一関市)

日時：令和3年11月9日(火)14時～

場所：一関市役所

受領者：「全国地ビールフェスティバル

一関実行委員会」会長 佐々木 賢治 様

授与者：国土交通省 東北地方整備局

大竹 将也 建政部長



(備考)

- ・神崎良一プロジェクト委員長「「昨年同様」を禁句に、いいイベントにするため何か出来ないか常に考えてきたが、継続して良かった」
- ・佐々木会長「まだまだ伸びしろがある。一関の魅力発信へ30年、40年と続けたい」
- ・岩手日報等に記事掲載

【全国地域づくり推進協議会会長賞
(小さな拠点部門)】

HUB a nice d! (ハブ ア ナイス ディ)
(鹿児島県瀬戸内町)

日時：令和3年11月22日(月)10時～

場所：瀬戸内町役場

受領者：「HUB a nice d!」

代表 山本 美帆 様

授与者：国土交通省 国土政策局 地方振興課

渡部 元 地域づくり活動推進官



(備考)

- ・山本代表「受賞は、移住者の私に寄り添い支えてくれた地域の先輩方のおかげ。
これからは、地域と島外をつなぐ場としても活動の幅を広げていきたい」
- ・表彰式には、施設を利用して居酒屋を営む男性や、ヨガ教室を開いている女性など住民9名も参加。「やりたいことを実現でき、今の自分があるのはハブディのおかげ」「涙が出るほど嬉しい」
- ・南海日々新聞等に記事掲載

【国土計画協会会長賞】

シルバーふれあいサロン やまゆり
(新潟県柏崎市)

日時：令和3年11月16日(火)14時～
場所：国土交通省 北陸地方整備局庁舎
受領者：「シルバーふれあいサロン やまゆり」
代表 青木 健 様
授与者：国土交通省 北陸地方整備局
芭蕉宮 総一郎 建政部長



(備考)

・青木事務局長「ボランティアの運営で15年も継続していること、商店街の真ん中であり、賑わいの核になっていることが高く評価されたものと思う。」

「表彰を受けて、ボランティアはとても喜んでいい。今後も高齢者や市民のよりどころとなる店を続けたい」

「何をおいても、スタッフから『楽しい』と言ってもらえるのが一番」

「これからも、シニアが生き甲斐を感じ、楽しく運営ができればいい。」

・北陸地整 芭蕉宮部長「大変優れた取組。さらに活動を発展させて欲しい」

・新潟日報、柏崎新報等に記事が掲載

【日本政策投資銀行賞】

株式会社 元気アップつちゆ
(福島県福島市)

日時：令和3年10月27日(水)15時～
場所：福島県庁舎
受領者：「株式会社元気アップつちゆ」
社長 加藤 貴之 様
授与者：福島県
鈴木 正晃 副知事



(備考)

・加藤社長「土湯温泉の知名度向上に努め、温泉街の賑わいにつなげたい」「これからも新しいことに挑戦していきたい」

・加藤恵美子専務取締役・最高執行責任者も同席

・福島民報、福島民友等に記事掲載

【地域づくり表彰審査会特別賞】

DEJIMABASE (デジマベース)

(長崎県長崎市)

日時：令和3年11月13日(土) 13時30分～

場所：「出島メッセ長崎」

受領者：「DEJIMABASE」

代表 江口 忠宏 様

授与者：国土交通省 国土政策局

呉 裕一郎 地方振興課長



(備考)

・江口代表「何かやりたい人の背中を押してあげる取組が評価を受けて光栄。無理せず継続できていることも大きい」

・長崎新聞等に記事掲載

【地域づくり表彰審査会特別賞】

松浦市

(長崎県松浦市)

日時：令和3年11月2日(土) 10時～

場所：松浦市役所

受領者：松浦市長

友田 吉泰 様

授与者：国土交通省 国土政策局

呉 裕一郎 地方振興課長



(備考)

・友田市長「『アジフライの聖地』をきっかけに、市民にふるさとに誇りを持ってもらうとともに、多くの人に松浦を知ってもらい、訪れてもらうことで波及効果をもたらしたい」

・長崎新聞等に記事掲載

【地域づくり表彰審査会特別賞】

パーフェクトビーチ・里海
ヘルスツーリズム推進協議会
(大分県豊後高田市)

日時：令和3年12月3日(金)10時～

場所：豊後高田市役所

受領者：「パーフェクトビーチ・

里海ヘルスツーリズム推進協議会」

会長(豊後高田市市長) 佐々木 敏夫 様

授与者：国土交通省 国土政策局 地方振興課

渡部 元 地域づくり活動推進官



(備考)

・佐々木会長(豊後高田市市長)「荣誉ある賞を頂き、光荣。今後も関係者一同、頑張りたい」

・NPO法人長崎鼻B・Kネット 近藤哲憲 理事長「これからも五感で楽しめるリゾートの魅力さをさらに強化したい。地場産業との連携も強めていければ」

・大分合同新聞等に記事掲載

【地域づくり表彰審査会特別賞】

長 島 町
(鹿児島県出水郡長島町)

日時：令和3年10月27日(水)16時～

場所：長島町役場

受領者：長島町長

川添 健 様

授与者：国土交通省

藤巻 浩之 九州地方整備局長



(備考)

・川添町長「町民が楽しみながら取り組んでいる結果が誘客にも繋がっている」

・南日本新聞に記事掲載

参考1. 「地域づくり表彰」制度の概要

1. 目的

地域づくり表彰制度は、創意と工夫を活かした優れた自主的活動で、広域的な地域づくりを通して、地域の活性化に顕著な功績があった優良事例を表彰することにより、地域間の連携と交流によって地域の個性ある自立を広範囲にわたり促進し、地域づくりの奨励を図ることを目的としています。

2. 方針

当地域づくり表彰制度は、多様な分野での地域づくりに対して、包括的な観点から優良事例を選定・表彰するものです。表彰の対象は、次のいずれかに該当する地域の活性化に顕著な功績があった地方公共団体・団体・個人です。

- (1) 創意工夫を活かした優れた自主的活動等を基本とする地域づくりを通して、地域の活性化に顕著な功績のあったと認められるもの
- (2) 地域づくり行政を通して地域の活性化に顕著な功績のあったと認められるもの
- (3) その他地域間の連携と交流による地域の活性化に関し、特に表彰が必要と認められるもの

3. 表彰部門

(1) 小さな拠点部門

中山間地域等において、基幹集落に複数の生活サービスや地域活動の場を集め、周辺集落とネットワークで結ぶ「小さな拠点」を形成し、地域住民の生活サービス機能を維持するとともに、地域外から所得を獲得し、または地域内外の住民の交流を促進する取組等を対象とします。

(2) 地域づくり部門

上記取組以外で、地域活性化を図るため創意と工夫を活かした優れた自主的活動で広域的な地域づくりに係る取組を対象とします。

4. 審査の視点

審査会は、主に次のような視点に重点を置いて行われます。

(1) 活動の広がり

地域づくりの取組が、地域ぐるみで、広範囲に行われているか。

(地域の一体的な取組や、多様な主体との連携により、活動の規模や交流の範囲が年々広がっているかなどがポイントです。)

(2) 継続性

地域づくりが継続的に実施されているか。

(活動を続けていることに加え、新たな取組を創出し、年々内容が充実しているかなどがポイントです。)

(3) 地域資源の活用

地域づくりに地域資源がどのように活かされているか。

(地域資源のブランド化、普及促進など、地域の持つ産業・歴史・文化・自然・環境等の特性が十分に活かされ、地域資源が最大限度に活かされているかなどがポイントです。)

(4) 創意工夫

創意工夫を活かした、独自の地域づくりが行われているか。

(他の参考となるような先進的・先導的な発想、工夫を凝らした取組があり、独自の地域づくりが行われているかなどがポイントです。)

(5) 成果

地域づくりの成果が着実に上がり、地域の活性化につながっているか。

各部門で、以下のような効果をもたらす地域活性化に寄与しているかがポイントです。

① 小さな拠点部門

「小さな拠点」を形成し、地域住民の生活サービス機能を維持するとともに、地域外から所得を獲得し、または地域内外の住民の交流を促進する等の効果をもたらす、地域活性化に寄与しているか。

② 地域づくり部門

地域の文化の再発見や地場産業への効果など、様々な面で地域づくりの枠を越えた効果をもたらす、「付加価値を高める地域づくり」となっているか。

5. 各賞の決定

地域づくり表彰審査会では、審査員による書類審査等の結果を踏まえ、以下の各賞を決定します。

(1) 国土交通大臣賞

各部門において、地域の活性化に特に顕著な功績があり、当該活動が主として「活動の広がり」「継続性」「地域資源の活用」「創意工夫」「成果」の視点(評価基準)に重点をおいて審査し、総合的に高い評価を受けた優良事例

(2) 全国地域づくり推進協議会会長賞

地域の活性化に顕著な功績があり、評価基準では総合的に高い評価を受けるに至らなくても、特定の分野で優れた活動を長期間にわたり行うことにより、地域づくりに多大な貢献をしていると認められた優良事例

(3) 国土計画協会会長賞

地域の活性化に顕著な功績があり、国土の利用・整備及び保全あるいは地域間交流の促進に寄与し、地域づくりに多大な貢献をしていると認められた優良事例

(4) 日本政策投資銀行賞

地域づくり活動を通し、産業の振興開発を促進し、経済の発展に顕著な功績があった事例

(5) 地域づくり表彰審査会特別賞

地域づくりの奨励の観点から、審査会において表彰することが必要と認められた事例

以上

参考2. 令和3年度「地域づくり表彰」総評

令和3年度地域づくり表彰審査会

座長 坂田 一郎

(東京大学総長特別参与 工学系研究科教授)

創意と工夫を活かした個性ある地域づくり活動を奨励するため、昭和59(1984)年から始まり、今回が第38回目となる「地域づくり表彰」につきましては、本年においても、全国各地から計30もの多様な事例が推薦されて参りました。

厳正な審査の結果、今年度は、総合的に優れた最優秀賞に相当する「国土交通大臣賞」を2つの部門毎に1事例ずつ、地域活性化への顕著な功績を賞する「全国地域づくり推進協議会会長賞」に2事例、国土の利用・整備・保全等に係る功績を賞する「国土計画協会会長賞」に1事例、地域産業の振興等に係る功績を賞する「日本政策投資銀行賞」に1事例、地域活性化への功績を賞する「地域づくり表彰審査会特別賞」に4事例と、計10事例を表彰することとしました。

いずれも、「活動の広がり」「継続性」「地域資源の活用」「創意工夫」「成果」の観点から優れており、審査会において高い評価を得たものです。特に、今年度の事例においては、女性の活躍が目立ち、「利他」の精神に基づく、魅力的な活動が多い印象を強く受けました。

受賞各団体におかれましては、表彰を期に、ますますの活発な取組みを進められることをご祈念申し上げるとともに、全国各地の皆さまが、各表彰事例をご参照いただくことにより、個性的で魅力ある、更に新たな地域づくりの輪が広がっていくことを期待しております。

参考3. 令和3年度「地域づくり表彰」審査会委員名簿

(有識者)

委員	伊藤	聡子	フリーキャスター
委員	くまがえ 熊谷	まさし 匡史	株式会社日本政策投資銀行常務執行役員
委員	さかた 坂田	一郎	東京大学総長特別参与 兼 工学系研究科教授
委員	せ 瀬	たふみ 田史	東京大学大学院工学系研究科准教授
委員	藤井	さやか	筑波大学システム情報系社会工学域准教授
委員	ほりぐち 堀口	まさひろ 正裕	株式会社第一プログレス代表取締役社長 兼 TURNS プロデューサー

(50音順、敬称略)

(国土計画協会)

委員	きど 幾度	あきら 明	一般財団法人国土計画協会専務理事
----	----------	----------	------------------

(全国地域づくり推進協議会)

委員	峰	たつろう 達郎	全国地域づくり推進協議会会長 (唐津市長)
----	---	------------	-----------------------

(国土交通省)

委員	吉田	こうぞう 幸三	国土交通省大臣官房審議官
----	----	------------	--------------

以上

参考4 令和3年度「地域づくり表彰」受賞団体の概要

【国土交通大臣賞】

<地域づくり部門>

○三津浜地区にぎわい創出実行委員会（愛媛県松山市）

<小さな拠点部門>

○春日活性化委員会（佐賀県嬉野市）

【全国地域づくり推進協議会会長賞】

○全国地ビールフェスティバルー 関実行委員会（岩手県一関市）

○HUB a nice d!（鹿児島県瀬戸内町）

【国土計画協会会長賞】

○シルバーふれあいサロン やまゆり（新潟県柏崎市）

【日本政策投資銀行賞】

○株式会社 元気アップつちゆ（福島県福島市）

【地域づくり表彰審査会特別賞】

○ODEJIMABASE（長崎県長崎市）

○松浦市（長崎県松浦市）

○パーフェクトビーチ・里海ヘルスツーリズム推進協議会（大分県豊後高田市）

○長島町（鹿児島県長島町）

（以上、10団体、順不同）

地域づくり表彰

三津浜地区にぎわい創出実行委員会
(愛媛県松山市)

港町の魅力ある地域資源を 活用した新たなにぎわい創出

三津浜地区にぎわい
創出実行委員会

委員長

せむら ようじろう
瀬村 要二郎



1. 松山市の概要

松山市は、愛媛県のほぼ中央にある松山平野に位置し、温暖な瀬戸内海気候により年間を通して降水量は少なく、穏やかな気候に恵まれた街です。

また、西側には海、東側には山、中心部には商業施設がある、自然とのバランスの取れたコンパクトな街です。

古くから松山城を中心として発展してきた城下町で、道後温泉が有名な温泉地でもあり、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』を軸とした物語のあるまちづくりに取り組んでいる魅力あふれる街となっています。



道後温泉本館

2. 活動開始の背景・経緯

三津浜地区にぎわい創出実行委員会の活動エリアである三津浜地区は、昭和中期までは海上交通や物流の拠点として栄えた港町でしたが、近年は、交通手段や物流の変化、近隣港等の整備により港町としての相対的位置づけや機能が大きく変化したことに加え、地区の人口・世帯数が減少傾向にあることから、まちの活力低下が懸念されるようになりました。

しかし一方で、地域や住民によるまちづくり活動が活発に行われるようになり、個性的なイベントの開催や空き店舗等への出店が見られるようになるなど、三津浜の地域資源が再評価され、活性化に取り組む動きが広がってきました。

こうした機運の高まりを背景に、

市と協働で活性化を推進するため、地域資源を活用した活性化の指針を作成するとともに、新たなにぎわいの創出と交流人口の拡大を図ることを目的として、まちづくり活動を行う団体の代表者を構成メンバーとする「三津浜地区にぎわい創出実行委員会」を組織しました。



三津浜地区の全景

3. 地域の宝としての磨き上げ

過去に物流の拠点として松山市発展の礎をつくった港町であったことや、かつての財や文化を物語る近代的建築物や町家等の風情ある町並みが残る、市内でも貴重な地区であること、また、地元でお好み焼きが庶民の味として浸透していたことなど、地理的特徴や歴史的背景等を踏まえ、新たなものを作り上げるのではなく、昔から地元で親しまれてきた身近なものを魅力として再評価し、空き家・空き店舗を活用した取組やお好み焼きをご当地グルメ「三津浜焼き」としてブランド化する食文化を活用した取組など、地域の宝として磨き上げることで、地域資源を活性化に最大限活用しています。



ご当地グルメ「三津浜焼き」

4. 継続的な取組

空き家・空き店舗を活用した取組では、地域に新たなにぎわいが生まれる体制整備に注力しており、平成25年度から地区内のにぎわい創出の拠点として「三津ハマル」を設置し、地区の空き家・古民家の橋渡しをする「町家バンク」を展開。



三津浜にぎわい創出事務所「三津ハマル」

平成27年度からは地区内の空き店舗を改装し、安価な賃料で賃借可能な「チャレンジショップ」を2件、



チャレンジショップの内観

平成30年度と令和元年度には1棟の建物に複数店舗が出店できる「シェアショップ」を2件整備するなど、その規模や対象範囲を広げるなど、地域への新規出店を促進しています。

また、整備したシェアショップでは、収益事業としてサブリースを行っており、2件のシェアショップの新規出店者からの家賃を、三津浜地区活性化の財源として活用しています。



シェアショップ「みつのほ」お披露目式

5. 活動の広がり

食文化を活用した取組では、愛媛県内のご当地こなもんグルメを対象として平成26年度に初開催した「えひめご当地こなもんサミット」から、中四国、全国とイベント規模を年々拡大しており、特に、平成28年度に開催した「全国ご当地こなもんサミット」では、西日本で初開催となった「ゆるキャラグランプリ2016」と同時開催し、北は北海道、南は九州まで全国各地から26店舗の出店があり、来場者は約32,000人の全国規模のイベントへと成長しました。イベント開催にあたっては、地元住民、銀行等の企業や大学、高校、市役所など約130人のボランティアに参加していただき、産・官・学が一体となった取組となっています。



こなもんサミット出店者とスタッフ

空き家・空き店舗を活用した取組や食文化を活用した取組により、市内を中心に認知度向上やにぎわい創りを図ることができましたが、より多くの方へPRし、効果を上げていくため、「古民家」や「食文化」などジャンル別に制作した5本のプロモーション動画をYouTube上で公開し、その魅力を全国に向けて発信しています。



三津浜地区プロモーション動画

こうした全国的な認知度向上の結果、地区外の方が三津ハマルの町家バンクを使って、店舗の出店や移住につながるなど、取組が複合的に展開されることで相乗効果が生まれるといった広がりを見せています。

6. 創意工夫

町家バンクは、いわゆる空き家バンクとは異なり三津浜地区に新たなにぎわいを創出することを目的として、それに適した空き家の情報を収集し、所有者と利用希望者とのマッチングを図っています。

また、町家バンクを利用して地区内に新規出店や移住して来られる方に対して、地元関係者の紹介や地区の情報提供など、地域振興の観点から地元との関わりを重視しながら実施しています。



町家バンクを活用した店舗

三津浜商店街に設置したチャレンジショップは、起業家支援ではなく、新規出店促進を目的に実施しており、誰でも申し込むことができるほか、賃料を低く設定し、出店期間を3年間と上限を設けることで独立開業を促す仕組みにしています。また、チャレンジショップ利用者が地区内に出店を希望する際に、「町家バンク」や「シェアショップ」を活用して希望物件が見つけれられるよう、事業を連携させて、地区への新規出店促進の効果が発揮されるよう制度づくりを工夫しています。

7. 成果

空き家・空き店舗を活用した取組では、三津ハマルの町家バンクによって平成25年度からの約8年間で、起業や移住などの相談件数は400件を超え、143件の物件登録と75件のマッチングに成功し、うち57件が地区への新規出店、25件が移住につながっています。



チャレンジショップからの新規出店

また、食文化を活用した取組では、ご当地こなもんグルメを集めた「ご当地こなもんサミット」を毎年開催（令和2年度は新型コロナウイルスの影響で中止）し、平成26年度から令和元年度の計6回で、累計104,600人が来場。さらに、イベントの仕組みやノウハウを他都市に無償提供し、開催することで三津浜の認知度向上につながっています。



こなもんサミットの様子

令和2年度にYouTubeで公開したプロモーション動画は、令和2年12月公開から約3ヵ月で再生が35万回を超えるなど、コロナ禍でも多くの方に三津浜の魅力を伝えています。

8. 課題と展望

三津浜地区には、港町として栄えた歴史・文化や独自のご当地グルメなど、多くの魅力的な地域資源があるものの、いわゆる「観光地」という性格は弱く、多くの空き店舗や空き家の存在がまちの活力低下につながっていました。しかし、一見するとマイナス要素である空き店舗等を地域資源として捉え直し、三津ハマルが町家バンクによりマッチングを図ることで、新たな店舗の出店や移住が促進されるなど、プラス要素に好転することができました。

今後は、この好循環を維持・拡大しながら、まちの集客ポテンシャルを高め、市内全域にその効果を波及させることで、松山城や道後温泉に次ぐ第3の観光拠点を目指して活動を続けていきます。

地域づくり表彰

春日活性化委員会（佐賀県嬉野市）

**廃校、耕作放棄地、高齢者、これまで隠れていた宝物に
光を当て、新たな魅力として育んでいくプロジェクト**

春日活性化委員会

代表

なかばやし しょうた
中林 正太



1. 嬉野市の概要

嬉野市は佐賀県の西部に位置し、人口は約2万6千人ほどです。1300年以上前の太古の時代から人々を癒してきた嬉野温泉は「日本三大美肌の湯」として名高く、「うれしの茶」の産地として600年の歴史を刻んできた「日本茶のふるさと」でもあります。また、市内の中心を貫く塩田川の水運と有明海の干満差を生かして陶磁器の原料を積み上げる川港としてかつて栄えた塩田津を中心に、大規模な製陶工場跡が当時のまま残る「志田焼の里博物館」やレトロモダンなデザインが特長の肥前吉田焼など、肥前窯業圏（日本遺産登録）のゆりかごとして歴史的な威風をたたえているまちです。



2. 活動拠点の春日地区

嬉野市の吉田地区内山間地に位置する「春日地区」。春日地区にある遺跡から縄文時代の石器などが発見されており、太古から人が居住していたと言われています。明治11年当時の「嬉野区役所」の調書には、春日地区の人口は479人（世帯数108戸）と記されており、小さい地区ながらも多くの人でにぎわっていたことがうかがえます。



3. 活動開始の背景・経緯

明治8年に開校した旧吉田小学校春日分校は、春日地区の中核となり、区民運動会や敬老会を主催するほどでした。しかし、少子化で平成13年の統廃合により閉校となりました。その後数年は地域の方々により公民館などの集会所の代わりとして月に数回使用されていましたが、高齢化により維持管理が出来なくなり、市へと返還され、その後何の計画もないまま荒れ初めていました。140年以上ある歴史と、豊かな自然に囲まれたロケーション、また人口約100人の春日地区を何とか守って行かなければならないという思いから、春日実行委員会を設立しました。

4. これまでの取り組み

旧吉田小学校春日分校を2016年3月に「分校 Cafe haruhi」として活用を開始しました。市街地からは車で約15分山を登らなければならない立地から、最初の2年間は売り上げを軌道に乗せるため、飲食店営業に注力し、少しずつお客様が増えてきたことから、2018年から念願だった地域との交流をスタートしました。飲食店営業の傍ら、月に一回「春日地区交流会」と題し地域の高齢者へとお声掛けをし、食事を行いました。交流会の回を重ねるごとに、地域の方々の春日地区に対する想いと私たちが春日地区でやっていきたいと感じていたことが重なっていくことを感じ、分校 Cafe haruhi を拠点に一緒に春日地区全体を盛り上げていく活動にしていくこととなり、2020年ありのまま春日というプロジェクトがスタートしました。このプロジェクトでは、耕作放棄された茶畑になる実を集め、油を搾る「茶の実プロジェクト」を実施し、2021年には、地域で油を生産するために

「搾油工房 山ん中」を開業しました。また、耕作放棄された田畑を活用する目的から農業もスタートし、現在8反の田畑を地域の方々のご協力により耕作しています。

「分校 Cafe haruhi」

春日地区といえば、嬉野市内に住む方ですら一度も訪れたことがないような場所でした。しかし、分校をカフェとして活用し、春日地区住民の方々と協力してイベントを行うことで、年間5000人以上の方々が訪れる場所になりました。



分校 Cafe haruhi

「むかし美人の会」

haruhi は地域の方々の拠り所にもなり、交流会を重ね、思い思いの意見を伝えあうことで、最初は「自分たちなんてもう、高齢で何もやれない」と話されていた住民が、今では自らを「むかし美人の会」と命名し、イベントでの出店を何よりも楽しみにしていると話されるまでになりました。



郷土料理をふるまうむかし美人の会

「茶の実プロジェクト始動」

お茶の樹に花が咲き、実がなることはあまり知られておらず、さらにその実から油が摂れるとは考えもしないことでした。しかし、春日地区に住むご高齢の方々は、戦時中実際にお茶の実油を搾り、学校に寄付したり、整髪料として使用していた経験を持たれていました。地域の方々にとっての「当たり前」が、外部の人から見るととても魅力的に見えたり、斬新なアイデアに見えたりするのだということを感じ、それらを形にした時「当たり前」の違ひから”価値”が生まれていると感じました。



茶の実油を利用した商品

5. 継続的に実施していくために

地域活性化とともに新たに人を呼び込むための手段として、雇用の場を設ける必要があると考え、haruhiの従業員として4名雇用しました。さらに、「茶の実プロジェクト」や農業のため、市外・県外から4名雇用しました。



カフェの従業員

また、継続的な収益を生むための仕組みを構築しようと、「茶の実プロジェクト」により商品開発・販売を行いました。開発に際し、地元住民のアイデアを取り入れるべく、交流会等でワークショップを行い、試供品を使用してもらうことで、適格なアドバイスをいただきました。ともに実施することで地元住民の積極性が見られるようになり、春日地区への想いを少しずつ形にできていることを実感しました。



交流会でのワークショップ

6. 創意工夫

如何に地域の方々と一緒にやれるかということを一に考え、何をやるにも地域の方々にお声掛けし、協力を仰いだり、アイデアを頂いたりすることはとても意識をしています。その結果、自らできることを考え、「むかし美人の会」を設立し、郷土料理のふるまいや定期交流会を開催されています。また、農業では地元住民の持ち物やノウハウをいただき、できる部分は地元住民で行ってもらい、農機具やノウハウなどを提供してもらうことで協力体制のもと農作業を実施しています。



地元住民との茶の実採取の様子

7. 成果

嬉野市内に住む人ですら一度も訪れたことがないような場所だった春日が、カフェの利用で訪れるお客さんはもちろん、haruhiでウェディングパーティーや同窓会など、地元住民をはじめとする嬉野市民が集う場として選ばれるようになりました。



ウェディングパーティー

また、マルシェ (harurhi 日和) の開催で20店舗以上が集まり、市内市外問わず人が集まる場所になりました。



マルシェの出店者

加えて、「自分たちなんてもう、高齢で何もやれない」と話していた地元住民らが、今では自らを「むかし美人の会」と名付け、イベントの際には積極的に出店されるようになり、活気に満ちています。委員会立ち上げのときからの、如何に地域の方々と一緒にやれるかという想いが通じ、形になった何よりの証拠だと思います。さまざまな活動を行うことでこれらの自主性だけでなく、茶の実の採取やプロジェクトの活動を通して耕作放棄地の減少にもつながりました。

8. 今後の課題と展望

2020年末から耕作放棄された田畑をお借りして、農業を本格的にスタートしました。まずは地元住民より要望があった土地約1.5ヘクタールを活用し、1~2年かけて春日地区の気候に合う野菜を選定し、プランディングを行っていく予定です。最終的には地域住民の方々にもその野菜を栽培していただき、春日活性化委員会として買取りを行うことで、地域全体の収入アップにもつながればと考えています。

また、空き家の活用をしてほしいという要望も出てきており、民泊を行う等、これまで春日地区になかった「滞在」という体験を出来る場所にしていきたいと考えています。

課題として、農業や空き家活用といったように地域の要望を知れば知るほど新たな事業が生まれてきてはいるのですが、それらをやるための初期段階の人と資金をどう繋げていくかが一番の課題と感じており、そのためにも一つ一つの事業を丁寧にやっていかなければならないと痛感しています。

地域づくり表彰

全国地ビールフェスティバル^じ 実行委員会 (岩手県一関市)

全国地ビールフェスティ
バル^{いちのせき} 実行委員会

全国各地の地ビールと地元野菜のおつまみで乾杯！
「全国地ビールフェスティバル in 一関」

プロジェクト委員長

かんざき りょういち
神崎 良一



1. 一関市の概要

一関市は、岩手県南部、東北地方の中央に位置し、首都圏からは約450 km、仙台と盛岡の中間地点にあり、面積は岩手県内で第2位、岩手県南、宮城県北の『中東北の拠点都市』として、経済・文化・教育の中心となっています。

宮城、秋田の両県に隣接し、狛鼻溪や厳美溪の名勝地、一関温泉郷などの観光地があり、世界遺産「平泉」や三陸方面への観光拠点ともなっています。

栗駒山(標高1,626m)、室根山(標高894m)などの山々、東北一の大河・北上川など、四季折々に多彩な表情をあらわす豊かな自然に恵まれた地域です。



名勝「厳美溪」・日本百景「狛鼻溪」

2. 活動開始の背景・経緯

一関市は、北上川をはじめとした河川の他、湧き水も多く、いこしえより清らかで豊富な水の恩恵を受けており、酒類の製造が盛んな地域であり、市内にもブルワリーが存在していました。

そのような地域の特性もあって、平成9年度に岩手県南広域振興局事業として、平泉町観自在王院跡で平泉町と一関市が協力して開催したことが当イベントの始まり。

平成10年度以降は、一関市観光協会が事務局となり、各地に点在する

草創期の地ビールの普及を図り、関連産業の発展と地域振興及び活性化を目的に官民一体となった組織体制を構築して、イベントを継続的に開催してきました。



第6回(平成15年度)のポスター
(ブルワリーは39社)



第20回(平成29年度)のポスター
(ブルワリーは100社)

3. 活動内容

「全国地ビールフェスティバル in 一関」では、市内事業者が一関地域で生産されている農産物を使用した料理を提供するなど、イベントを通して地域の特産品をPRし地域の

活性化に貢献する活動を行っています。

市外からのおつまみ出店や、地ビール以外のお酒での出店要望の問い合わせを多数いただきますが、一関の地ビールフェスティバルのポリシーとして、「おつまみは地元の業者で」、「お酒は全国からの地ビールのみ」という部分を当初から貫いています。

イベントで使用する使い捨てのプラスチックコップの排出量を削減することを目的とした特製グラスの製作・販売や資源の再利用を促進するため、イベント会場内にエコステーションを設置して、来場者へ廃棄物の分別を呼び掛けるなど早くから環境に配慮した継続的な取り組みを行ってきました。



全国の地ビールと地元野菜の
手作りおつまみがズラリ

4. 活動の広がり

実行委員会の内部組織であるプロジェクト委員会は、市内に事業所を置く酒造メーカー、酒飯店、報道機関、飲食店、JR一関駅、JAIわて平泉、商工会議所、観光協会などで構成するイベントの実行部隊。

委員が連携して主体的にイベントの内容を検討し、開催までの準備を行っています。

イベントスタッフのアルバイトは、岩手県内の大学や専門学校の学生を

中心に協力をいただいています。

また、ボランティアスタッフは、全国各地から応援に駆け付けており、交流人口の範囲も広がりを見せています。



イベントスタッフはおそろいのTシャツです

5. 継続性

飲食を伴うイベントということもあり、新型コロナウイルス感染症の影響で開催が危ぶまれましたが、コロナ禍でのイベントのあり方を模索・検討し、全国のブルワリーと市内飲食店や酒販店等が連携したスタンプラリーイベントや、オンラインによるLIVE配信など、積極的に新しいイベントの形の構築に取り組みました。

毎年、新たな取り組みを柔軟に実行できるよう体制づくりに取り組んでいます。



スタンプラリーイベント



初の試み LIVE配信

6. 地域資源の活用

一関市では、令和元年度に地ビール類を対象に中小企業地域資源活用

促進法に基づく「ふるさと名物応援宣言」を行い、全国地ビールフェスティバルは市が応援するふるさと名物をブランド化に結び付けるイベントとして位置づけ、開催をサポートしています。

また、おつまみの出店については、一関市内の事業者に限定して募集を行っており、食材は、地域内で生産されている特産の夏野菜（なす、ピーマン、トマト、きゅうり、ミニトマト）をJAと市の協力により無償提供いただいています。



新鮮野菜のおつまみは大好評！

イベント会場内では、野菜ソムリエと一関市農林部地産地消・外商課による地元農産物のPRをしていただいています。



野菜ソムリエの皆さんによるPR

7. 創意工夫

JR一関駅が実行委員会の構成員となって、イベント期間に特別臨時列車が運行され、その際、実行委員会から乗客へのプレゼント企画を実施するなど、市内関係団体との連携を深めています。

公共交通機関（バス）でのCM放送や、首都圏の地下鉄への中ぶり広告、キャラバン隊を編成してのテレビ出演など、より多くの皆さんにイベントを知ってもらうため広報活動に力を入れてきました。

日本最大級といわれる参加ブルワ

リーの数は、第20回開催では100となり、1つのイベントでより多くの地ビールをお客様に楽しんでもらえるよう、毎年、新たに募集するブルワリーの情報収集や営業活動に取り組んでいます。



個性豊かな地ビール

8. 取り組みの成果と展望

一関市の夏を象徴する一大イベントとなり、全国各地から「地ビールの聖地」へ集うファンが多く、市内の交通・宿泊・飲食・観光など、地域経済へ好循環をもたらしています。

取り扱う地ビールの数やイベント自体の楽しさや魅力が集客力を生み、2016年・日経プラス1の「なんでもランキング 行って楽しいおすすめの世界ビールフェスティバル」第1位、2020年・日本ビアジャーナリスト協会による「世界に伝えたい日本のビアカルチャー イベント・料飲部門」第2位など、メディアからも注目されるイベントとなりました。



一関の夏を象徴する駅前看板

地ビールファンの皆さんのニーズを探り、お客様の満足度を第一に、関係する全国各地の皆さんとの絆を大切にし、「不易流行」の理念のもと、一関市ならではの地ビールフェスティバルを今後も継続できるように、創意工夫をこらして地域に根差した取り組みを進めていきたいと思っています。

地域づくり表彰

HUB a nice d! (鹿児島県瀬戸内町)

～ひとりのママの孤独から始まった地域の人が集まり
チャレンジが生まれる小さな拠点づくり～

ハブアナイスティ!
HUB a nice d!
代表
やまもと みほ
山本 美帆



1) HUB a nice d!所在地域の概要

世界自然遺産に登録された鹿児島県の離島、奄美大島の南部に位置する瀬戸内町阿木名地区に HUB a nice d!があります。空港から車で2時間弱、海と山に囲まれた自然豊かな小さな集落です。



伊須湾に朝日が昇る阿木名集落

約750人が暮らしており、平成31年3月に陸上自衛隊の官舎が建設され、転勤族の移住家族が約2割の人口を占めています。

2) HUB a nice d! の概要と取組

HUB a nice d! は築70年の空き家を地域の方々と共にリノベーションをして生まれました。

チャレンジ&コミュニティスペース HUB a nice d!



ロゴに込めた願い

- 奄美大島に生息するハブをモチーフに、太陽から出てくる様子
- 蛇のハブ：金運アップの象徴（創業支援）
- HUB：集まる・拠点という意味
- ハブアナイスティ：良き1日を通じさせるようにという願い

多くの人が集まる HUB の拠点

一人ひとりのやりたいこと・チャレンジしたいことにフォーカスして、曜日・時間毎に様々な取

り組みが生まれるよう、3つの「創る」を実現できる場に育てています。

①夢を叶える小さな一歩を踏み出す場を創る「チャレンジショップ」

飲食店を開きたい夢をもつが、資金面や物件を保有することなど開業へのハードルが高く、なかなか踏み切れない人や、小規模や副業としての開業を考えている人への店舗貸し提供や経営支援を行なっています。転勤族のママが期間限定で数ヶ月間カフェを開業したり、副業で週末のみ居酒屋を開業したり、他地域に店舗を持つ飲食店が出張出店をしたり、小さく始める一歩の場として機能しています。元は飲食店が無かった集落なので、食を通じて人の流れが生まれるようになりました。



地元の青年が副業で居酒屋を開業

また、学習塾がない地域に、子どもたちが遊びや日常の経験から学ぶ場として平日夕方には地域の寺子屋学習塾が開業しています。元小学校教師の教室長が、奄

美大島の自然豊かな環境を使い、様々な学びを地域の子どもたちに提供しています。

子どもたちの未来や、島と本土を繋ぐ積極的なチャレンジ支援を行っています。



島外の大学生と子どもたちとの交流
(SDG 8 海ごみで楽器を作るワークショップ)

②多世代で地域が繋がる場を創る「コミュニティスペース」

阿木名集落やその周辺の集落の方々が、赤ちゃんから高齢者まで多世代で集い、地域のことを語り未来を描く場を作っています。現在はコロナ禍で人を多く集めることができませんが、地元の食材を阿木名集落地域食堂にてみんなで食べたり、学生と大人たちが交えて地域の未来を語ったりする場として使われています。



阿木名集落会主催の地域食堂

③ママが子連れで働ける・学べる場を創る「レンタル/コワーキングスペース」

ママたちの小商い創業支援を行ったり、子連れでも働けるようにキッズスペースや子ども達の興味を惹く場を作ったり、子育て中でも学ぶこと、働くことを諦めない場づくりを行なっています。



ママたちの子育て×学び×仕事

Wi-Fi や業務用キッチンを完備しているので、料理教室や魚の捌き方教室、ハンドメイド教室やヨガなど、それぞれがやりたいことを実現できる場として活用されています。また、町の助産師とチームを組み、子育て世代に必要な情報の学びの場を継続的に開催しています。



地元の漁師による魚の捌き方講座

3) 活動の動機・背景

HUB a nice d! の創設者は夫の転勤を機に、仕事を辞め、知り合いのいない奄美大島に移住しました。キャリアを失い、頼れる人もいない地に移住し、急な人生転換に戸惑い、孤独・挫折を感じました。それでも、島の人たちの温かさに触れ、自身の子育てを通して様々な人たちと出会う中で、転勤族でも子育て中でも

働ける場が欲しい、社会と繋がれる場が欲しいと、小さなチャレンジを応援しあえるコミュニティを創るために空き家を改修しHUB a nice d!を立ち上げました。

4) 場づくりは地域住民と共に変化を楽しみながら

場を作る段階から、多くの地域住民を巻き込むことで、完成後を楽しみにしてくれるファンを増やすために、空き家古民家のリノベーションを行う際は、土間作り・漆喰塗り・内外装の塗装など、DIY ができる範囲は地域住民と一緒にイベントごととして実施しました。周囲の地域住民の方々だけでなく、行政職員や島外の大学生からの応援をもらいながらリノベーションを行ってきました。



住民や大学生も交えてDIY

5) 人流を作りモノ・コト・ヒトが交わる拠点に

チャレンジショップとして飲食店が立ち上がり、集落に人の流れが生まれるようになりました。その後、コミュニティスペースとして様々なイベントが行われ、老若男女多世代が集まる拠点となっています。



子連れ親子の居心地の良い空間
小さな拠点ながら集落住民だけで

なく、他地域からの利用も多く、人の交流が生まれ、モノやコトの交わる部分が増えることで地域活性に繋がっています。この場で出会った地域のママたちがチームを組み、商品開発事業にも取り組んでいます。

6) 地域課題を解決する新たな働き方の場として成長中

初めは孤独な一人のママの思いから始まったプロジェクトでしたが、今では地域の課題を一人で解決しようとするのではなく、移住者・地元の人と分け隔てなく、各々が得意とすることを仕事にしながら地域課題解決の糸口に繋がるステージを提供することで、地域住民が地域に関わる余白の裾野を広げています。今後は、小さな拠点で地域を楽しみながら課題を解決していきたいという仲間が集まった「ギルド組織」のまちづくり会社としての法人化を目指しています。



チャレンジの芽を育てる場

7) 一人ひとりのチャレンジに光を当てるHUBとして

小さなチャレンジをしてみるならHUB a nice d!と、毎月様々なチャレンジショップやイベントが出店され人流を生み出してきました。趣味や特技を仕事として創業することを応援し、小さな一歩を踏み出す場として、これからも一人ひとりのチャレンジに光を当てて共に応援しあえるHUB 拠点として、「持続可能な地域づくり」を目指していきます。

地域づくり表彰

シルバーふれあいサロンやまゆり（新潟県柏崎市）

全国でもめずらしい157名の
ボランティアが運営する直売所

シルバーふれあいサロン
やまゆり

責任者
あおき けん
青木 健



1. 柏崎市の概要

柏崎市は、日本海に面し新潟県の県のほぼ中央に位置する人口8万人弱の風光明媚な地域。柏崎刈羽原子力発電所を有しており、主に中小の製造業、観光産業などが中心となっている。

かつては宿場町として栄えた街も少子高齢化の波にのまれ、近年商店街ではシャッターが閉まったままの店が目立ってきている。



日本海から望む米山大橋

2. シルバーふれあいサロンやまゆりの概要

シルバーふれあいサロンやまゆりは、全国でも珍しい完全ボランティアによる運営の直売所。シャッターの閉まっていた地元えんま通り商店街の空き店舗を活用して平成18年4月にオープンした。オープン時120人だったボランティアは15年たった現在157名となっている。



やまゆり全景

開店は10時～15時で年中無休、ボランティアは毎日日替わりで午前4名、午後3名のローテーション。平均すると2週間に1度、半日から

いの出番だが、中には毎週出てくれる方もいる。

店頭に並ぶのはシルバー人材センターの会員が自宅で丹精込めて作った野菜や手作り作品などで、シニア層を中心に連日賑わっている。

この直売所が賑わいの核となって、以前は空き店舗が目立っていたえんま通り商店街に活気が出ており、最近では若い人たちの出店も相次ぎ、現在空き店舗無しとなっている。



開店時の賑わい

3. 持続性の維持

ボランティアによる運営に助けられ採算は何とか取れており、今後も賑わいの核として自主運営できる体制となっている。圧倒的なボランティアの数で個々の負担を軽減し、お互いに都合をつけあうことで運営母体に負担をかけることなく日々のルーティーンがしっかりと回っている。



イベントへの出店

4. 出品希望者やボランティアの広がり

この直売所に出品したいから、仲間になりたいから会員になる方も少なくなく、ボランティア希望者も微増傾向にある。また、野菜作りを習いたいという希望も多いことから体

験型農場「みんなの農場」を開設し、出品者のスキル向上、農福連携などに貢献している。そのため後継者不足や出品者の不足などにより継続不能になるという心配はない。



農場の開設

5. 地域資源の活用

やまゆりの店舗はもともとシャッターの閉まっていた洋品店に交渉し、安価で借りて運営している。また備品は市の粗大ごみなどを払い下げていただいて活用したため初期費用はほぼかかっていない。



地元のお野菜も豊富に並ぶ

オープンの翌年に発生した「中越沖地震」で甚大な被害が出たにもかかわらず僅か3か月で再開を果たしている。この成果が地元商店街の復興の後押しにも繋がっており、内外から注目を集めている。



イベントで賑わう商店街

6. 体験型農場は耕作放棄地を活用

いままで野菜を作ったことがない人や直売所に出せるような野菜作りを学びたい人向けに立ち上げた体験型農場「みんなの農場」は、地元農家が後継者不足などで放置していた耕作放棄地を借り受け運営している。地元農家は荒れ放題だった畑が活用されているため大変喜んでおり、使わなくなったビニールハウスやトラクターなども無償で提供してくれるなど、とても良い雰囲気運営されている。



みんなの農場参加者

7. 運営維持のコツ

開店当時全国のチャレンジショップなどを調査した際、開店から数年で廃止に追い込まれている店が多いことに気づき、そうならないためにはどうしたらよいかということメンバーで真剣に話し合い、現在の運営の形が出来ている。

店にレジは置かず誰でも簡単に店番の出来る「もぎり方式」にするなど、徹底的にボランティアの負担を軽減した。

農場をしつらえることで出品希望者のスキルアップの仕組みも作ったため野菜の品質も上がり、品ぞろえも増えた。



店頭並ぶ新鮮な野菜

やまゆりに来る客層はほぼシニア層で、売っている商品もシニア向けの商品が多い。あえてスーパーマー

ケットのような万人向けの品ぞろえにせず、シニアが好む商品のラインナップにしたことでターゲットニングに成功した。また、店内にお茶やコーヒーを飲める談話スペースを設置し市民とボランティアの憩いの場所となっている。



シニアで賑わう店内

8. 商店街の振興と生きがいの創出

開店時にはちょっとした行列が出来ると、やまゆりに客足が途絶えないことから、賑わいの核として商店街振興会からは認識され、様々なイベントにも中心的な役割を担うようになった。

やまゆりに立ち寄ったお客様が商店街の他の店舗にも立ち寄る姿がみられ、商店街の活性化にも一役買っている。

その成果が評価され「キラッと光るよいお店新潟県知事賞（奨励賞）」「内閣府社会参加章」を受賞。さらに台湾における「熟年マンパワー就労国際実務シンポジウム」において事例発表を行っており、ボランティアのモチベーションに繋がっている。ボランティアの皆さんは口々に「ワクワクする」「楽しい」と言っており、この店そのものが「生きがい」の創出の場になっている。



店内で談笑するシニア

9. 農福連携と6次化

有機栽培を意識し地産地消を実現した体験型農場が出来たおかげで、地元の保育園や小中高校、特別支援学校などから農業体験の申し入れもあり、近年では障がい者支援団体とコラボした6次化にも取り組むなど、

食育やSDGs、エシカル消費などに特化した活動も顕著になってきている。売れ残った野菜をフードバンクに提供するフードロスの軽減や障がい者の就労機会を創出する農福連携にも取り組んでおり、その輪がどんどん広がっている。今後はオーダーメイドの出来る農場、直売所として研鑽をかさねていきたい。



農場体験の様子

やまゆり店内にはシルバー会員が丹精込めて作った新鮮な野菜の他、季節に合わせて手作りした手芸品や陶芸品が所狭しと並び、定期的に特売イベントなども開催されている。



店内に並ぶ福祉作品

また、市内の福祉作業所の皆さんが機能訓練の一環として選別袋詰めをしている「わけあり大豆」や障がいを持った方たちの手作り作品などもお預かりして販売を行っており、シニアだけにとどまらず「生きにくさを抱えたひとたち」すべての一助になるための「アンテナショップ」の役割もはたしている。

柏崎市の新庁舎に併設されている売店や、市内のレストラン、JAの直売所、大手スーパーなどからも声が掛かり、コラボ商品や有機栽培に特化した専用コーナーなどでの野菜販売も始まっており、元氣なシニアの夢の追及はとどまるところを知らない。

地域づくり表彰

株式会社元気アップつちゆ（福島県福島市）

株式会社元気アップつちゆ

地域資源を生かした新たな産業の創出

代表取締役CEO

～ 地域まちづくり会社として ～

かとう たかゆき
加藤 貴之



1. 土湯温泉町の概要

土湯温泉町は、福島県の県北地方、県都福島市の中心部から西南に約16km、標高450mの高原に位置する県内でも有数の温泉観光地です。周囲を「磐梯朝日国立公園」に囲まれ、温泉街の中央を一級河川「荒川」が流れています。荒川とその支流にはこれまで度重なる水害の歴史から、多くの砂防堰堤が築造され、中には貴重な土木遺産の認定を受けたものもあります。また、荒川は国の清流調査において今年で「11年連続水質日本一」の榮譽に輝くなど、優れた自然環境や景観のほか、温泉は多様な泉質で湯量にも恵まれていることから環境省の「国民保養温泉地」に指定されています。



温泉街の風景

このほか、みちのく東北を代表する伝統工芸品の「土湯こけし」があり、例年4月には「こけし祭り」が開催され、大勢の皆様イベントをお楽しみいただいています。



日本三大こけし「土湯こけし」

2. 活動開始の背景・経緯

平成23年3月11日に発生した東日本大震災と直後の原発事故は、

土湯温泉町にも甚大な被害をもたらしました。建物の損壊と風評被害を伴った原発事故の影響により、震災前に営業していた16軒の旅館の内約3分の1の5軒が廃業し、年間宿泊客数は震災前の27万人から15.5万人にまで激減しました。

震災から7か月後、土湯温泉町の復興再生の志を持つ地元の方29名が集い「土湯温泉町復興再生協議会」が誕生し、「温泉観光地の将来を占うモデル地域の構築」、「自然再生エネルギーを活用したエコタウンの形成」など復興再生の5つのポイントを掲げました。



復興再生協議会 設立総会

そして、平成24年10月、復興再生の5つのポイントの一つ「計画を支える組織の確立」に向け、地元2団体が資本出資して「地域まちづくり会社」として当社が設立されました。その後、復興再生協議会は行政（福島市）の参画と地域全体を巻き込んだ「土湯温泉町地区まちづくり協議会」へと発展し、国土交通省の社会資本整備総合交付金「都市再生整備計画事業」を活用して、廃業した旅館を改修し、観光交流センターとまちおこしセンターとして再生しました。また老朽化した公衆浴場のリニューアルのほか、地域と行政で締結した「土湯温泉町まちづくり協定」に基づき、建築物の意匠、形態、色彩等の修景整備や、道路の美装化、ポケットパーク整備等に取り組んできました。



リニューアルされた公衆浴場

3. 地域資源の活用（発電事業）

震災時に三日間ほど続いた停電では春まだ浅く、時折小雪がちらつく寒さのなか、暖房器具が使えない経験をし、原発事故の風評被害も相まって、エネルギーに対する考え方が大きく変わりました。原発に頼らない環境に優しい再生可能エネルギーで土湯温泉町を活性化できないかと考え、高温で湯量も豊富な温泉と、温泉街を流れる河川の豊富な水量を活用した発電事業を構想しました。しかし、知識も経験もない素人が手掛ける事業のため、発電プラントの選定や事業資金の手当て、国の許認可手続きなど困難の連続でしたが、発想から5年後の平成27年に、ようやく発電所が竣工し運転を開始しました。



温泉熱によるバイナリー発電所

この事業のバイナリー発電所の年間発電量は約260万kWhで一般家庭の使用電力量で換算すると約800世帯分、小水力発電所は年間約140万kWhで一般家庭に換算すると約

200 世帯分を賄えることとなります。

4. 地域へ還元する仕組みづくり

土湯温泉町でも少子高齢化と人口減少が進み、地域コミュニティを維持するため、住みやすい地域を目指した「地域支援事業」を創設し、売電による収益の一部を地域に還元する仕組みを作りました。一つは、「土湯温泉足軽サービス」と名付け、土湯温泉町に住む 70～74 歳の車の免許を持っていない方を対象に市内を自由に乗り降りできるバスの無料パスを支給しています。もう一つは、「土湯温泉通学マイロードサービス」と名付け、高校、大学の通学生を対象としたバスの定期券を無償化しています。

今後も住民の負担軽減を図ることで、安心して生活できる地域を目指し、定住人口の増加に繋がる支援事業に取り組んでいきたいと考えています。

5. 地域振興・地域活性化事業

バイナリー発電所から排出される大量の冷却水と温泉を利用して、南米原産の「オニテナガエビ」の陸上完全養殖に取り組んでいます。このエビは「成長が比較的早く、釣りができ、高級食材で美味しい」という優れた特徴がありますが、水温の維持管理に大量の化石燃料を使うためコスト面がネックとなり全国的に実績はあまりありませんでした。このコスト面の課題を当地域の地域資源の温泉が解決し、陸上での完全養殖を可能にしたのです。



「つちゆ湯愛（ゆめ）エビ」と命名



エビの養殖水槽

令和2年8月にはエビの釣り堀を併設したコミュニティカフェ「おららのコミセ」を温泉街の一面にオープンしました。釣り上げたエビはバーベキューで食べることもでき、ちょっとしたアトラクションとして好評をいただき、賑わいを見せています。



カフェ「おららのコミセ」内の様子



併設の釣り堀

現在、年間 30,000 匹養殖していますが、共喰いの性質があるため実際には約 10,000 匹が生産量になります。今後は生産量を増やして旅館等へも安定して供給できるよう取組んでいきたいと考えています。

6. 地域資源の活用（農産物）

平成30年8月に福島市が国の構造改革特区「福島フルーツ盆地（ぼんち）酒特区」の認定を受けました。この特区を活用して地元酒米を使った「どぶろく」とフルーツ王国ふくしまのりんごを使った「果実酒（シードル）」を醸造・販売する酒蔵「おららの酒 BAR 醇醸蔵」を、空き店舗を改装して温泉街の一面にオープンしました。新たな地場産品と雇用の創出に繋がり、現在、市のふるさと納税返礼品にも登録されています。



「おららの酒 BAR 醇醸蔵」内の様子

7. 交流人口の拡大

自然エネルギーによる発電事業とエビの養殖事業の開始以降、これまで年間約 2,000 人の方に視察や研修、施設見学などで土湯温泉町にお越し

いただきました。



地熱体験エコツーリズム

8. 新たな事業の創出

コロナ禍でテレワークが推奨されている現在、温泉施設の一面に市内ベンチャー企業による「コワーキングスペース」が開設されました。温泉に入り、自然を楽しみ、創造力を持って働けると利用者から好評です。また、土湯温泉町では仕事（ワーク）と余暇（バケーション）を融合した「ワーケーション」事業に取り組んでおり、大自然に触れながらカヌーなどのアクティビティを体験した後に温泉に浸かり、心も体もリフレッシュして仕事をするという新たなワークスタイルを提案しています。



女沼でのサップの様子

9. 今後の展望など

今後は、各事業を安定して継続・発展させることにより復興再生を支える地域まちづくり会社として地域振興と活性化に努めていきたいと考えています。

今年の3月で震災から10年が経ちました。土湯温泉町は古くから土湯大火や度重なる水害に見舞われる度に地域全体で困難を克服してきた歴史があります。今年2月の福島県沖地震や新型コロナウイルス等の影響は依然としてありますが、ピンチをチャンスと捉え、地域全体で乗り切っていきたいと思っています。



土湯温泉キャラクター

©2013 きぼっこちゃん 土湯温泉

地域づくり表彰

DEJIMA BASE (長崎県長崎市)

愛されるためのきっかけづくり

～魅力ある地域は、地域を愛する人がつくる～

DEJIMA BASE 代表

えぐち ただひろ
江口 忠宏



1. 活動エリアの概要

DEJIMABASE が活動する出島エリアは長崎県南部、長崎市の中心市街地に位置する、鎖国で有名な出島の周辺のエリアです。特に、2017年に出島の前に整備された、一見公園に見えない、広い道路のような空間、「出島表門橋公園」を中心に活動しています。本エリアは、年間50万人を超える主要観光施設の出島の周辺ですが、市民にとっては、観光客が行く場所との認識が強く、数年前に県庁が移転してからは、人があまり訪れないエリアになっています。また、観光客も、数多くある観光地を梯子することが多く、ゆっくり訪れない場所となっています。



広い道路に見える表門橋公園

2. 活動開始の動機

長崎市中心部には、グラバー園、出島、大浦天主堂、眼鏡橋など、他のエリアが羨ましがらうくらいの名だたる歴史資源(観光地)がありますが、市民にとって、悪い意味で歴史が日常になりすぎており、これらの場所にあまり関心がない状況でした。そのような中、2014年に始まった『出島表門橋架橋事業』の設計チームとして、出島復元整備事業に僕たちは関わることになりました。事業が進む中で、改めて、市民の事業への興味のなさを感じ、更には出島表門橋架橋への反対運動が起こりました。このまま橋が完成すると、愛されない場所になると危機感を覚えました。

この場所が愛されるためには、橋の架橋を契機に、市民が出島エリアに関心、愛着を持ち、エリアの価値や魅力を再認識することが必要だと考え、表門橋の設計メンバーの有志で「DEJIMABASE」を立ち上げ、「愛される場所になるためのきっかけづくり」を始めました。



復元が進む出島和蘭商館跡

3. 活動の特徴

DEJIMABASE の活動の大きな特徴は、①誰にも頼まれていない「任意活動」であること、②期限と目標のない「継続活動」であること、③住民主体ではなく、「場所を愛する人の活動」であるという3点です。「エリア内外問わず、多くの人がある地域を愛してくれれば、自然に魅力ある地域がつけられていく」。これが僕らの考える地域づくりであり、継続性と頻度を意識しながら活動しています。

4. 活動内容

エリアに「愛を生む」きっかけづくりとして、①出島表門橋を知ってもらう、事業のファンをつくる『出島表門橋のPR』、②出島を意識してもらう為の『SNSによる情報発信』、③圧倒的な愛着を生む、出島表門橋を雑巾で拭く活動の『はしふき』、④多くの人がプレイヤー、多くの人の訪れるきっかけづくりの『表門橋公園活用サポート』の4つの活動を主にしています。

① 出島表門橋のPR

出島表門橋が架かるまでの期間、出島復元整備事業に「DEJIMAGAIN」という親しみやすいキャッチコピー、ロゴ、出島ポーズを作成しPRをはじめました。様々な企画をしましたが、「場所をつくる人の顔が見えるよう、設計者と会える機会をつくる」ことに特に力をいれました。



設計者と会える様々な企画

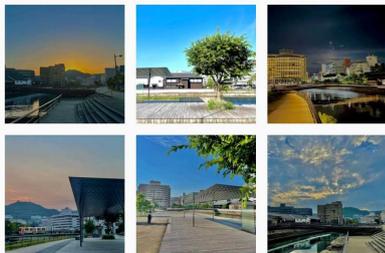
また、仮囲いや架橋イベントなど、市民を巻き込み、関心を持たせる活動も行いました。完成後は、大きなPR活動はしていませんが、橋を愛する人がそれぞれ、魅力を伝える活動を続けてくれています。



市民に関心を持たせる活動

② SNSによる情報発信

DEJIMABASEでは、出島の魅力を知ってもらうために3つのSNSを活用しています。情報発信はもちろん、多くの人達が「出島」を意識し、自然に気になる場所が変わっていくことを期待して、毎日、定時に更新をしています。



毎日更新している SNS

③はしふき

「はしふき」は名前の通り、出島表門橋を雑巾で拭く活動です。第2、第4月曜日の月2回、雨天決行、参加表明不要、手ぶらで参加、遅れてきても、早く帰ってもOK、拭かずにおしゃべりだけでもOK、「拭かないより、拭いた方がいい」という緩い想いで活動しています。不思議なことに、一度、「はしふき」体験すると、この場所が「じぶんごと」の風景に変わっていきます。



じぶんごとの「はしふき」

これまで、開始から3年半、コロナ過でも中止することなく、88回開催しています。平均15名の方が参加してくれていますが、毎回新規参加者がいることは面白いところです。また、毎回参加者が入れ替わり、常連メンバーが少ないところも特徴です。定期的で開催される「はしふき」は清掃の場だけでなく、エリアを愛する人々が集える場、エリアの魅力を発信する場になっています。また、最近では、愛知県の桜城橋でも「はしふき」が始まるなど、県外にも広がり始めています。

③ 表門橋公園サポート

出島表門橋公園が完成してから2年近く、認知度も低く、活用されて

こなかった為、令和元年度に長崎市と協働して、利活用の仕組みを構築し、公園利用者の発掘や公園利用のサポート（企画立案の補助、許可申請代行、物品の無料貸出）を始めました。DEJIMABASEが主体となって企画を実現することも可能でしたが、様々な主催者となり、責任を持って公園を活用することが、多くの人の愛着を生むきっかけになるため、サポート役に徹することとしました。



椅子・音響などの物品の貸し出し

また、実施される企画は、出島という場所でやる意味を考える為、「出島とのストーリー」を持つことを唯一のルールにするとともに、市民の苦手な部分をサポートし参加のハードルを下げることで、実現頻度、継続性を高めています。初年度は55の企画を実施し、協働事業が終わった次年度以降も、新型コロナの影響を受けつつも、様々な企画が継続され、新規イベントも立ち上がるなど、公園活用に広がりを見せています。このようなサポートを行うことで、多くの人達が継続して企画をやってくれるようになり、様々な人が公園を使ってくれることで、僕らだけでは広げることのできない方向に、この場所の魅力が伝わり始めました。

また、ナイトマーケットなどの参加しやすいイベントが定期開催されることで、公園の認知度が高まるとともに、イベント時、史跡を前に過ごす贅沢な時間が市民に出島の存在を再認識させてくれています。



定期的に行われる「出島宵市」



史跡を前に過ごす贅沢な時間

5. 活動による変化

活動を始めて約5年、愛されるための活動を続け、人々が定期的集まる機会をつくり続けたことで、色んな人同士が地域を語る機会も増え、公園の魅力に気づいた人々が、日常生活の中で利用してくれるようになりました。また、活動を通じて行政との強い信頼関係も生まれ、圧倒的なスピード感で様々な活動が実施されるようになり、長崎市内で最も活用されている公園になりました。出島エリアも、表門橋架橋後に個性溢れる店舗が数多くオープンし、以前からあるお店と合わせ、より魅力あるエリアになってきています。



日常生活で利用され始めた公園

6. 今後の展望

活動を初めてまだ5年足らず、未だ長崎市民で出島表門橋を渡ったことのない人がまだ数多くいるので、引き続き圧倒的な頻度と継続性で愛されるきっかけを作り続けていきたいと思っています。また、出島の対面では、エリアの活性化に大きな影響を与える県庁舎跡地の整備が動き始めており、県庁舎跡地の活用にも少しずつ関わりながら出島エリアを盛り上げていけたらいいなと思っています。それでは、第2、4月曜日、「はしふき」の日に、出島表門橋でお待ちしております。

地域づくり表彰

松浦市（長崎県松浦市）

“アジの水揚げ量日本一”

「アジフライの聖地 松浦」プロジェクト

松浦市
市長

ともだ よしやす
友田 吉泰



1. 松浦市の概要

松浦市は、長崎県本土の北端に位置します。伊万里湾を中央に配し、他の三方は佐世保市、平戸市、佐賀県伊万里市と接しています。山地が多く、入り組んだ海岸線は風光明媚であり、一部は玄海国定公園、県立公園となっています。

アジ・サバの水揚げ全国屈指の公設魚市場をはじめとして、トラフグ・クロマグロ・クルマエビなどの養殖も盛んであり、水産業が産業の重要な位置を占めています。



令和3年春に生まれ変わった松浦魚市場

また、国際貿易港や総出力 370 万 kw の石炭専焼火力発電所、LPG 基地があり、伊万里湾とエネルギーを活かしたまちづくりを進めています。平成24年3月には元寇の軍船や遺物が発見された松浦市鷹島町神崎免の沖合海域が、日本で初めての海底遺跡「鷹島神崎遺跡」として国史跡に指定されました。日本一のアジの水揚げを誇る本市をPRするため、平成31年4月27日には「アジフライの聖地」を宣言し、現在、市内30店舗でアジフライを提供しています。

2. 活動開始の背景・経緯

「松浦市をアジフライの聖地にする。」これは、平成30年2月に就任した友田吉泰市長の公約の1つでした。地域の素材に磨きをかけ、こだわりを創造して発信していくことが「地域づくり」につながるの思いがあった友田吉泰市長は、松浦市に当たり前にあった「間違いなく旨い

アジ」に着目。素材を磨き上げる（アジをフライにする）ことで「松浦＝アジフライ」のイメージを定着させる取り組みを開始しました。

3. 「アジフライの聖地 松浦」宣言

平成31年4月27日、松浦市と、日々アジフライを提供している市内の連携店（当時20店）は、おいしさを保つための独自の条文からなる「松浦アジフライ憲章」を掲げ、松浦市が「アジフライの聖地」であることを正式に宣言しました。令和3年9月現在、連携店数は30店まで増え、広がりを見せています。



「アジフライの聖地」宣言時の様子

4. アジフライに合うソース選手権

松浦水軍まつりは、毎年約3万人が訪れる松浦市最大のおまつりです。まつり実行委員会が「アジフライに合うソース選手権」を提案し、令和元年秋のまつりに併せて実施しました。事前に全国から応募があったレシピ11品を再現し、来場者に食べてもらい投票してもらうというユニークなスタイルで、会場ではアジフライを求め大行列ができました。投票で1位に輝いたのは“定番のタルタルソース”でした。



アジフライに合うソース選手権

5. アジフライデー制定

アジは魚偏に参(3)と書き、金曜日（フライデー）のフライ（揚げる）であることから、毎月第3金曜日をアジフライデーと制定しました。アジフライデーには市内小学校給食でアジフライを提供、市内連携店のアジフライデー割引キャンペーンや、全国の「アジフライの聖地 松浦」PR協力店でのPRを続けており、官民一体でアジフライデーを盛り上げています。



アジフライデーの長崎県庁食堂の様子

6. 進化を続けるアジフライマップ

毎年1回アジフライマップ(冊子)を更新しています。特集として、第1弾では市内のアジフライ食べ歩きマップ、第2弾は福岡天神人気食堂・梅山鉄平食堂をアジフライでジャック、第3弾はアジフライの名店・東京高田馬場の酒肴新屋敷とコラボレーションするなど、地元にとどまらず着々と全国へ取り組みの輪を広げています（アジフライに乗って全国へフライ（＝飛行））。また、当冊子のイラストを手掛けたのは人気アーティスト NONCHELEEE 氏。独特のタッチで一度手に取ると忘れられないデザインに仕上がりに、さらに当冊子はコンクールにおいて日本一となる数々の賞を受賞しました。



歴代のアジフライマップ

7. 体験型旅行アジフライメニュー

これまで約 30 万人を受け入れてきた「ほんなもん体験(体験型旅行)」。体験メニューに「オールアジフライ体験」が登場しました。地元漁師指導のもと沖でアジを釣ることからスタート。陸に戻ると地元の担い手がアジのおろし方、骨抜きなどのさばき方を丁寧に指導。実際に調理をし、聖地で新鮮なアジフライを食べて楽しむという贅沢な体験メニューとなっています。



アジフライ体験メニュー

8. 石工モニュメント

松浦アジフライ憲章第7条～私たちは、松浦アジフライのおいしさを広く伝播します～を実現するため、市の特産品である阿翁石と、約 450 年続く石工技術を活用し、市内4箇所にデザインが異なる「アジフライの聖地 松浦」石工モニュメントを設置しました。阿翁石は粘着力に富み繊細な加工に適しており、風化作用にも耐えるという特長を持ちます。このモニュメントは観光スポットとして「アジフライの聖地」を未来に繋ぐとともに、地元の石工技術の継承にも役割を果たしています。



石工モニュメント(道の駅鷹ら島)

9. PRアイコンロゴマーク

「アジフライの聖地 松浦」が目で見えるようロゴマークを制作しました。アジフライを箸で持つ斬新なデザインのロゴマークは、のぼり旗となり、全国での「アジフライの聖地 松浦」のPR役を担っています。



ロゴマーク



10. アジフライグッズ

人気アーティスト NONCHELEEE 氏の松浦観「青い海と空に映える'ポップ'でユニークなオンリーワン」を現実世界に表現するため、「アジフライの聖地 松浦」の存在を可視化したアジフライグッズが誕生しました。このアジフライグッズは松浦市限定で販売されており、観光客誘客のアイテムとなっています。アジフライグッズを通して、アジフライの美味しさを多くの人に伝えています。また、グッズのうちアジフライポロシャツ(背面にアジフライの作り方がデザイン)は市職員や市内飲食店、市民等のユニフォームにもなっており、市内全体で聖地PRを盛り上げています。



アジフライポロシャツ

11. 商標登録完了

取り組みの広がりとともに認知度が高まってきたため、松浦市は商標登録を出願し、令和2年12月に「アジフライの聖地」の商標登録が完了しました。



商標登録完了

12. “魚松味”アジフライ定食発案の先輩に続け! 地元高校に「地域科学科」新設

ジョイフル松浦店限定で「魚松味(うまかばい)」! (※造語)アジフライ定食」の販売が開始。これは、地元松浦高校と松浦市が地域の課題解決に取り組む教育活動(通称:まつナビ)の中で、高校の生徒の提案により実現したものの。この取り組みの影響もあってか、松浦高校に深化した普通科「地域科学科」が新設されます。この学科は地域の課題解決を学習し、学校の特徴をアピールしていくとのこと。「アジフライの聖地松浦」プロジェクトの成果は、今後ますます松浦市の子どもたちの未来を明るく照らしていくと信じています。



メニューを発案した地元高校生

このように、様々な取り組みとともに「松浦=アジフライ」の定着を肌で感じています。素材の発見⇒磨き上げ⇒地域との連携⇒発信⇒ロゴマーク⇒オリジナルブランド⇒知名度アップ⇒観光客誘致⇒商店街の活性化⇒素材の再発見⇒地域づくりと、一つ一つのピースが掛け合わさり「アジフライの聖地 松浦」が形になりました。今後も「アジフライの聖地」を核に地域経済を活性化させ、「魅力ある地域づくり」を目指していきます。

地域づくり表彰

パーフェクトビーチ・里海ヘルスツーリズム推進協議会
(大分県豊後高田市)

地域資源を活用したオリジナルの ヘルスツーリズムの確立を目指して

パーフェクトビーチ・里海ヘルス
ツーリズム推進協議会

事務局 いのうえ 井上 しげのぶ 重信



1. 豊後高田市の概要

豊後高田市は、大分県の北東部、国東半島(くにさき)の西側に位置し、域内には、瀬戸内海国立公園を擁し、山間部及び海岸部の自然景観や農村集落景観、六郷満山文化ゆかりの史跡等、豊かな自然と歴史文化などの地域資源が豊富です。

2. 活動開始の背景

本市には、海・里・山・温泉・歴史などの特色ある地域資源が数多くあるものの、いずれもその規模が小さいため、その特色を活かしたブランド戦略などのソフト面での取組が弱く、有効に活用できていないという課題を抱えていました。

そのような中、本市はリアス式海岸や遠浅の砂浜に広がる風光明媚な海岸線を有することから、その海岸線を走る「恋が叶う道=恋叶(こいかな)ロード」と名付けた国道213号沿線にある、日本夕陽百選に選ばれた「真玉海岸」、「花とアートの岬長崎鼻」などの女性の嗜好にあった観光スポットに着目。これらの強みを最大限に活かすため、海辺の付加価値を高めるなど、さらに魅力を向上させる事業を展開することとしました。



恋叶ロード

3. 花とアートの岬 長崎鼻

本活動について、その概要を説明する前に、舞台となる長崎鼻について

てふれたいと思います。

恋叶ロードの終点にあたる長崎鼻は、以前は一面に耕作放棄地が広がっていましたが、平成19年から地元有志が中心となり、耕作放棄地にひまわりの作付けを始めました。

平成22年には、長崎鼻と地域の共生を築き、地域社会の活性化を図ることを目的として長崎鼻B・Kネットが設立され、以降本格的に耕作放棄地再生事業に取り組み、徐々に花畑として再生していきます。現在では約16haの花畑が広がり、九州最大級の花公園となっています。



長崎鼻に咲くひまわり

ひまわり、菜の花の作付けには、農薬や化学肥料を一切使用しない環境にやさしい栽培にこだわりました。

平成25年には長崎鼻に、国内外の著名なアーティストによるアート作品が誕生し、アートと自然・花の融合による五感空間のブランド化が進みました。

また、花による観光再生だけでなく花によるオイル(菜の花油、ひまわり油など)を創出。現在、商品開発で価値あるオイルを製造・販路を拡大しています。



長崎鼻の全景

4. 新たな視点で観光戦略

本市を代表する観光地の一つに成長した長崎鼻ですが、個性的で魅力的ではあるものの、花の咲く季節や夏場のハイシーズンのみ賑わう観光地で、通年型観光地として訴求力が弱い点が課題となっていました。

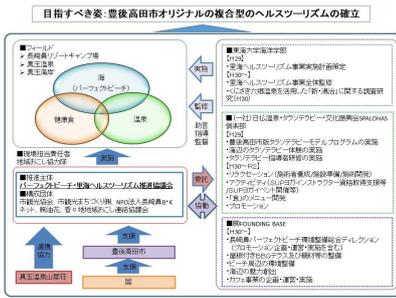
そこで、長崎鼻や周辺の恵まれた地域資源を新たな視点で組み合わせることによって、新しい価値を創出し、滞在型観光地へと転換できないか検討を重ね、着目したのが長崎鼻の美しい海、温泉、健康食材です。

まず、海の活用ですが、規模が比較的コンパクトでモデル事業に最適な長崎鼻リゾートキャンプ場を核に「安全・清潔・快適な海水浴場(パーフェクトビーチ)」を整備し、活性化を目指すこととしました。

それとともに、ヨーロッパを中心に実施されている海洋療法(タラソテラピー)と温泉療法のノウハウを導入することで、特色ある海、温泉、健康食などの小規模な地域資源を新たな視点で統合させ、豊後高田市オリジナルの複合型ヘルスツーリズムの確立を目指す「パーフェクトビーチ構想」を掲げました。

実施主体は、NPO法人長崎鼻B・Kネットや、市観光協会などが構成団体となる「パーフェクトビーチ・里海ヘルスツーリズム推進協議会」が担い、国内でも類を見ない先進性が高い事業であったため、「パーフェクトビーチ構想」については「学校法人東海大学海洋学部」、タラソテラピーについては「一般社団法人日仏温泉・タラソテラピー・文化振興会 SPALOHAS倶楽部」にそれぞれ事業監修や実施を委託しました。また、海辺の環境整備や誘客促進、管理運営については、全国で地方創生事業に取り組むベンチャー企業「株式会社ファウンディングベース」に委託。

より実行性の高い取組となるように
官民協働で事業を展開しました。



事業の全体像

まず、海辺の環境整備として、宿泊施設となるキャンピングトレーラーやグランピングテントを整備。併せて多用途で活用できるバーベキューサイトを整備するなど、ビーチの付加価値を高めるハード事業を実施しました。



宿泊施設となるキャンピングトレーラー

海辺の環境整備と並行して取り組んだのが、ヘルスツーリズムの核となるタラソテラピーの取組です。ハコモノに頼らない既存の資源を活用したフィールド型タラソテラピーとして、「リラクゼーション」、「アクティビティ」、「食のメニュー開発」の3部門で取り組みました。

「リラクゼーション」では、160万本のひまわりが咲き誇る長崎鼻の強みを活かし、ひまわりの種子を低温圧搾法で抽出したオイルと地元産の無農薬カボスの精油を使った「ウエルカムトリートメント」を開発。地元女性を中心に施術者を募集し、養成とレベルアップに努めました。



長崎鼻の高オレイン酸ひまわりオイル



ひまわりオイルを使用した施術の様子

「アクティビティ」では、サンドウォークやSUPヨガなどの健康体験プログラムを構築し、「食のメニュー開発」では、地元の健康食材である長命草などを使用したメニューを開発。これらを組み合わせた体験プログラムの商品化を図りました。



ビーチを活用したSUP ヨガの様子

5. 地域資源活用のこだわり

本市オリジナルのヘルスツーリズムの確立を目指すにあたり、限られた予算の中で最大限の効果をあげるべく創意工夫を重ねました。その一つが地域資源の有効活用です。

タラソテラピーの施術場所として長崎鼻や市内温泉施設など既存施設を活用。またアクティビティでは長崎鼻のビーチなど、地域固有の資源を活動の舞台とすることで、ウエルカムトリートメントや長命草を使用した健康食の提供と合わせ、単に予算の問題だけでなく、「ここでしか体験することができない付加価値の創出」にも繋がりました。



地元食材を活用したヘルシーメニュー

6. 持続可能な取り組みへ

以上のようにハード・ソフト双方

の環境整備と地域内連携により、市内外への価値提供の幅を増やしていった結果、長崎鼻全体の来場者数は令和2年には過去最高の11万人を超え、事業開始前の平成27年と比較し81%増という高い伸びとなりました。また、集客力が弱かった秋-冬シーズンの観光客が大幅に増加し、一年を通して訪れたい場所に変貌しました。これに伴い事業収益性も向上し、令和2年度の収支実績で黒字を達成し事業の自走化が実現しています。

さらに地域人材を中心に新たな雇用創出にもつながっています。タラソテラピーの施術者のレベルアップのため定期的な研修も実践しており、持続可能な運営体制が構築できました。

7. 成果と今後の展望

本取組で、誘客イベントや提供している食材など、地域と連携を図ることで、より一層利用者への価値提供ができており、「長崎鼻」・「地域」・「利用者」三方よしの仕組み化が実現しました。

また、地元高校生が地域食材を活用した商品開発・販売までを実践するマルシェを開催。地元住民、企業による継続的な環境美化活動や、誘客イベントが開催されるなど、着実に「活動の広がり」を見せています。

また、多くの地域人材が事業に参画したことや、メディアなどにも度々取り上げられることで、長崎鼻の認知度も向上し、シビックプライドの高まりにもつながりました。



地域と連携したイベントの様子

これまでの約5年間の取組により、目指してきた豊後高田市オリジナルの滞在型保養地としての素地はでき、また、持続可能な仕組みも構築できました。今後も市民、そして観光客双方に愛され、そして健康になる長崎鼻を目指して、地域の人々と一丸となって取り組んでいきます。

地域づくり表彰

長島町（鹿児島県長島町）

～長島ぐるっと一周フラワーロード～

鹿児島県 長島町

長島町長

かわぞえ たけし
川 添 健



1. 長島町の概要

長島町は、鹿児島県の最北端の町として薩摩半島の北西部に位置し、四方を東シナ海、八代海、長島海峡などの海に囲まれ、島の一部は雲仙天草国立公園に指定される等豊かな自然に恵まれた地域で、長島本島のほか大小26の島々が点在します。



雲仙天草国立公園の眺め

昭和49年4月には、黒之瀬戸大橋の開通により阿久根市と結び長島本島は離島から半島化しました。

また、伊唐島と諸浦島はそれぞれ伊唐大橋と乳之瀬橋で長島本島と繋がっており、現在は獅子島だけが有人離島であり、離島振興地域に指定されています。



黒之瀬戸大橋と日本三大潮流の渦潮

平成24年からは、町内に多くある自然石を使った「石張り花壇」と、景観に配慮した「石張り」や「石花」を長島一周に施すとともに、四季折々の花々を植栽し、多くの観光客が増えるとともに、癒しスポットのドライブコースとなっています。

2. 活動開始の背景・経緯

長島町は、平成18年に旧「東町」と旧「長島町」が合併して誕生しました。もともと離島であったこともあり、両町の融和や一体となった魅力あるまちづくりが大きな課題でした。

平成19年、解決策として花に着目。町は「長島町ふるさと景観条例」を制定。具体的施策として、国道・県道沿いを花壇でつなぐ「フラワーロード」を提唱し、地域住民や地域団体が自主的に花壇管理を行う制度を開始しました。



フラワーロード沿いの花壇

町全体で取り組みを推進し、平成23年に町全体が会場とも言える「夢追い長島花フェスタ」が開催できるようになりました。以降も花の取り組みは拡大し、統計がとれる範囲では「フラワーロード」の花壇総延長は約14kmで約10万本。メイン会場の公園では約30万本もの花が咲き、期間中延べ15万人が長島町を訪問するイベントとなりました。



町第10回夢追い長島花フェスタ花壇

3. 活動のひろがり

○ふるさと景観サポーター

3団体28人（平成19年）から始まり、現在では83団体1,433人（令和2年9月現在）となりました。町人口の1割以上が登録され、現在も登録団体は増えております。「サポーター」以外に、苗の育成、運搬、提供、苗の寄付といった活動を行っており、取り組みに関する関係人口は計り知れないです。また、花壇総延長14kmだけでも全国に類のない規模であると思われ、さらに花壇以外に草木の花が広がり続けています。また、近隣市にも広がり、長島の入口から阿久根北ICまでの約9kmの大半や、新幹線の最寄駅である出水駅近くの沿線にも花壇が波及しています。



景観サポーター

4. 継続的な活動を実現するために

継続的な活動を実現するためには、町の広報誌を活用し、花壇管理者の募集や新規認定者の紹介、ボランティアの活動紹介等、花に関連する情報を10年以上に渡りほぼ毎月、200を超える記事を掲載してきました。また、活動を充実させるために町では、花づくりの模範となる景観賞を設定し、毎年表彰を行っている他、種蒔き講習会の実施、花を育てるにあたっての悩み相談窓口を設けるなどの取り組みを行っています。他には、

令和3年度「地域づくり表彰」表彰式 実施報告書
(関係者用)

発行 令和4年2月 発行
編者 令和3年度「地域づくり表彰」事務局
問合せ先 国土交通省 国土政策局 地方振興課 渡部、馬場
電話 03-5253-8404 (直通)